

## 5) オミナエシとオトコエシ=女郎花とオトコエシ=男郎花

オミナエシはオミナエシ科の多年草で、日本各地の陽当たりの良い山野に自生する。アジアに広く 15 種が分布し、日本ではそのうち 5 種類が知られている。高さは 60cm～100cm に達し、葉は対生し羽状に細かく切れ込む。9 月頃に細かい黄色の花を散房状に付ける。和名の由来は糯米で作るおこわ飯のことを「男飯」といったのに対し、粟飯のことを「女飯」といったが、この花が女飯に似ていたため、オミナメシがオミナエシになったとする説が有力である。また旧仮名ではオミナヘシと記し、ナヘシはナベシ、並べしのことから花が配列された様子を形容したもの、という説もある。別称も多くオミナメシ、チメグサ、アワバナ、ボンバナ、コガネバナ、コージグサ、オンナメシ、カルカヤ、またアイヌの言葉ではトプカルキナともいう。ボンバナは仏前に供える風習のためである。学名は『*Patrinia scabiosaefolia*』で、属名はフランスの植物学者 E.L.パトリの名に因み、種小辞は「マツムシソウのような葉」という意味である。中国では『黄花龍芽』とか『敗醬』といい、後者は花を生けた後に残る水の匂いが、独特の臭気を放つところから醬(ヒシオ)にたとえたものである。しかし『敗醬』は一般的にはオトコエシの方を指す。漢方では根を乾燥させたものを『敗醬根』(ハイショウコン)と呼び、煎じて消炎や排膿、更には通経や産後の腹痛など婦人病に効くといわれている。

万葉集にはオミナエシを詠んだ歌が 14 種あり、『女郎花』のほかにも、『娘子部四』『佳人部為』『美人部師』『姫部思』『姫押』などとも記している。

吾が郷に今咲く花の娘部四(オミナ) 堪(タ)へぬ心になほ恋ひにけり  
私の故郷に咲く娘部四の花のように娘盛りになった美しい君を見ると、恋する心をこらえることができない。というほどの意味であろうか。

平安時代になると、「女郎花合」(オミナエシアワセ)という遊びがあった。左右に別れて女郎花の花に歌を添えて出しあい、その優劣を競うもので、「撫子合」と同様の遊びだった。

謡曲の『女郎花』は昔、八幡の里に住む男を慕って、京から訪ねてきた女が、男の心変わりを知り川に身を投げて死ぬと、女の残した山吹龔(ヤマブキカサネ)の衣が朽ちて、そこから女郎花が生えてきたという伝説によるものである。この物語は鎌倉時代の僧、宗碩(ソウテイ)が記した『藻塩草』(モシオグサ)に記述されている。

オミナエシは連作を嫌い、同じところに何年も植えておくと、いつのまにか消えてしまうので、時々脇に出る小苗をほかの場所に植えるようにするとよい。

さてオトコエシはこれもオミナエシ科の多年草である。オミナエシと同様に日本各地の陽当たりの良い山野に自生し、夏から秋にかけて白い小花を無数に付ける。株はオミナエシよりも一回り大きく、高さは 1m に達する。和名の由来は女郎花に対するものだが、別称としてオトコメシ、ボンバナ、シロアワバナ、コージグサ、キバナなどともいわれている。前述のように中国では『敗醬』といわれ、女郎花と同じような異臭を放つが、昔は葉を食用にもしていた。学名は『*Patrinia villosa*』である。



鮮やかな黄色のオミナエシであるが、連作を嫌い、毎年植え替えてあげないといつの間にか小さくなって、そのうち消えてしまう(東京都小平市薬用植物園)。



オミナエシは秋を運んでくる花でもある(東京都小平市薬用植物園)。





オトコエシの花。オミナエシは女郎花と記すが、これは男郎花と記す(東京都小平市薬用植物園)。



オトコエシとよく似た花にソクズ(次ページの写真)があって、しばしば間違える。しかしこちらのほうはスイカズラ科で、ニワトコの仲間である(東京都小平市薬用植物園)。



このためソクズは別名クサニワトコ(02-03-06 ニワトコの項参照)といわれている(埼玉県寄居町)。





ソクズの学名は『*Sambucus chinensis*』で、オトコエシに似ている(埼玉県寄居町)。 [目次に戻る](#)